九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

福岡藩儒竹田春庵と朝鮮通信使

大庭, 卓也
日本学術振興会特別研究員

https://doi.org/10.15017/8946

出版情報：語文研究. 93, pp.14-24, 2002-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

福岡藩儒竹田春庵と朝鮮通信使

大庭卓也

一　はじめに

享保頃を境として近世文化の諸現象に様々な変移があることを考えると、正徳元年の韓使来訪は、まさに文学史の様相も大きく変わろうとしていた時期になされたとも考えられよう。前回、すなわち天和度の来訪時より、韓使との筆談唱和が盛んに行われ始めたこと、『通航一覧』巻百八に指摘する通りであるが、この度の来訪でその風は頂点に達した。

韓使が帰朝した翌二年五月には、瀬尾用拙斎編『鶏林唱和集』（十五巻八冊）が、十二月には、その続編の『七家唱和集』（十巻十冊）という大部の筆談唱和集が刊行された。前者が対馬儒員として韓使に随行した雨森芳洲、松浦霞沼の贈答詩文を多く収め、後者が深見玄岱、室鳩巣、祇園南海ら木下順庵門下七人の唱和集であったように、本書はこの応接の中心をなしたのが木門系の儒者たちであった一事を文壇に印象づけた。加うるに、江戸で俄然、勢いを得ていた荻生徂徠一派も、これに対抗して一門の唱和集を『問槎畸賞』（同年冬刊三巻三冊）として刊行したこと、日野龍夫「入江若水伝資料」（『服部南郭伝攷』　平12　ぺりかん社）に論じられる通りであり、かく天和度を凌ぐ分量の筆談唱和集が生み出されたのは、天和文壇の雰囲気が正徳という時代にそのまま流れ込んでいた徴証にほかならない。しかし、『問槎畸賞』において、韓使との唱和に腐心することを批判する意見[註1]が出されるに至ったのは、端無くも、この度の韓使来訪を通して、来るべき文学史上の変移を予想させるに充分な現象であった。

わが福岡藩は、韓船の中継地の一である藍島（あいのしま）（現福岡県粕

屋郡新宮町相島）における応接を担当しており、正徳度の筆談唱和は、貝原益軒門の竹田春庵（寛文元年～延享二年）および神屋松堂がその任に当たっている。春庵らの筆談唱和の概略、およびその背景となる春庵周辺の福岡詩壇の状況に関しては、福岡県立図書館寄託竹田文庫を基礎資料として執筆された、『福岡県史　通史編　福岡藩　文化（下）』（平６西日本文化協会）第五章、宮崎修多・高橋昌彦「漢詩文」に詳しいが[註2]、近年、同文庫ともと一体であった九州大学附属図書館所蔵の竹田家旧蔵資料の全容が明らかになるなど[註3]、資料整備のうえで進展が認められる。以下は、このような現状を踏まえて、春庵の韓使応接に関する新知見を提示し、それが右に述べたような文学史的背景といかに連動しているのかという問題にまで考察を及ぼしたものである[註4]。

二　唱和詩の成立

春庵の正徳元年の日記『正徳元年藍島記』（以下『日記』と略記[註5]）によれば、藍島入りをしたのは七月二十四日、悪天候のため韓船が島に到着したのは予定より大幅に遅れた八月十九日、韓使との対面は、その日の晩、二十一日、二十四日の三回に亘って行われた。この間の筆談唱和は、のちに春庵の手によって『藍島倭韓筆語唱和』としてまとめられ、私に数えれば六回の筆談、十三回の唱和が収められている。相手となった韓使は、一行中、最も文名が高かった製述官の李礥（号東郭）をはじめ、書記の厳漢重（号龍湖）・南聖重（号泛叟）・洪舜衍（号鏡湖）が主で、そのほか医員の奇斗文（号嘗百軒）、写字官の李貞谷・李花庵なる人物とも筆談を交わしている。

刊本にせよ写本にせよ、筆談唱和集には、両国の修好を互いに祝する唱和詩が整然と列挙され、その連続は、すべてが淀みなく順調に行われたような印象を与える。そして唱和詩を文学資料として扱うとき、その淀みない連続を一種の安堵感のうちに読み進めてゆくのを常とする。しかし韓使との唱和が、学者あるいは詩人としての名声を得る絶好の機会であったならば、その連続は、まさに緊張の連続でもあったに相違なく、その中でも、最も緊張する瞬間は、最初に韓使と唱和を行うときであったことも、また相違あるまい。とすれば、その場に臨むまでの過程には、真摯な準備段階が存在する筈であり、唱和詩を文学現象として見なす場合、こうした試行錯誤の痕は当然視野に入れておくべきであろう。

例えば、春庵が藍島へ渡る二日前、春庵の韓使に呈する詩および筆語に添削を加え終えたことを報じる七月二十二日付

け益軒の書簡（九九三-四四四）、および益軒がこのとき批語を書き入れた春庵自筆の草稿（九一五七）が残る。書簡の一節では、天和度の応接を勤めた経験を踏まえ、添削を加えた理由を箇条書きにして次のように言う。

昨日、□□□（ヤブレ）後日、藍嶋御渡被成□□□（ヤブレ）節、風穏（かぜおだやか）候へかしと□□（ヤブレ）韓客へ御示訓被成候芳唱等、昨今致緩覧候。御佳作、殊宜（ことによろしく）相見へ申候。非諛言候。任御望、少々加点竄候。然共、自前年数々盛作御示之時、申候様、御見合被成奉存候而も、宜方ニ可被成候。

一、日本ノ事、「弊邦」とハ如何（いかゞかと）存候。筑州之事ハ弊邦、可然候。

一、「一貼」之事、中夏之書ニ而「一服」を称「一貼」候事、有之候や、覚へ不申候。御考可被成候。「一貼」とハ、本邦之俗称ニ而ハ無御座候や。膏薬などハ「一貼」と可申候。それハ「一つけ」と申意（まうす）か。…

益軒は主に、春庵が朝鮮における薬剤分量を問うた筆語の方に添削を加えており、箇条書きで質すのはその表現に関してであるが、注意されるのは、益軒が「殊宜相見へ申候」とあっさりと受け流した詩の方で、草稿を見ると、益軒に提出したのは、次の四首の七言絶句であった。傍記小字は益軒の添削である。

仙槎再見旧時賓　青眼依然情益親　為喜楓階攀月桂　文星揚耀照殊隣

呈某公

恭陪館下。辱蒙青眼。豈堪倣抃。謾呈一絶。以代訳舌。

曾慕殊方文物昌　幸逢龍節入扶桑　交隣修好太平日　勿厭梯航道路長

又

万里乗槎志気雄　壮遊将效博望功　海涵旌旗瑞霞湧（影）　鳳覩争先仰徳風

又

長風八月送星槎。彩纜暫懸（留）藍嶼（嶋）涯　幸望裳衣陪館下　照人丰采浄無瑕

右には省いたが、第一首目には「洪公閣下」なる人物に呈する旨を述べた長文の序がある。うち「…頃（このごろ）、閣下、曾テ文衡ノ選ニ中（あた）リ、再ビ通信ノ聘ニ随フヲ聞ク。…閣下、昔年、南遊シテ、文扶桑ニ鳴リ、児童モ風ヲ慕ヒ、草木モ名ヲ知ル。僕、当時、辱（かたじけな）クモ識荊ヲ蒙ル。…幸ヒ今、未了ノ縁ヲ頼ミ、復タ鳳覩ニ諧（あ）フヲ獲（う）。真ニ奇遇ナリト謂フベキナリ。…」（原漢文）と、再会を喜ぶ記述があるのを見ると、「洪公閣下」は、天和度の韓使一行中、益軒の唱酬相手として『損軒詩稿』

（福三八二五、写本一冊）に見える裨将・洪滄浪であろう。滄浪も東郭と同様に文名が高く、筆談唱和を通じてわが国の学者文人たちに大きな影響を与えた人物である。林門の幕儒・人見竹洞との親密な交誼は、その一例としてよく知られるところであろう。[註6] この度、滄浪は来訪しておらず、結局渡されることはなかったが、不明な点が多い春庵の伝記に、天和度の韓使と唱和を行っていた事実を付加するものとして、この草稿段階の詩を注意しておきたい。[註7] さて、その他の三首は、いずれも序の「某公」が示すとおり、不特定の人物を想定しての詠である。「交隣」「乗槎」「星槎」「彩纜」など、唱和詩特有の類型的な表現に著しく陥っているのはそのためであろう。実際、春庵は藍嶋入りから約一週間を経た七月晦日にいたって、趙泰億・任守幹・李邦彦など正使・副使・従事、即ち三使の名前をようやく知り得ていたほどで（『日記』）、ましてや唱和の相手となる製述官や書記の名前は、対面する直前まで知らなかったと思しい。

韓船到着の遅れは、好都合にも、春庵に筆談唱和の準備をする充分な時間的余裕を与えることとなった。これら予行練習としての詩と筆語は、益軒の添削に従って改稿され、『日記』二十八日の条に写し直されている。また翌八月六日の条には、李退渓以後の朝鮮における学者や、朝鮮の算学書に関する質問条々の文案が書き留められ、更にそれを写し直した草稿（九一七六）も残る。

これら草稿類や文案を手にして、十九日の晩、韓使との対面に臨んでいたことは、当日の『日記』に記される「唱和控記」という語によって確認されよう。

…（対馬藩儒・雨森芳洲を）先容にて学士舎ニ入。其前揖礼習再揖也。唱和控記、酒□（呑）童子大□（江）へ酒入合手来。茶碗にて臺ニすへ李学ニ遣。又其茶碗にて酌、芳洲ニ進、又拙者ニ進。其後、洪鏡湖、厳龍湖、南泛叟へ進。…

『藍嶋倭韓筆語唱和』の方に就けば、雨森芳洲、その門人の桂洲道倫、塩川春洲らを介添えとして各々名乗りを交わした後、第一唱の詩を詠んだのは春庵であった。その詩は「唱和控記」、すなわち先の草稿中、益軒が一字も訂正を施さなかった二首目の七言絶句である。但し、草稿での承句の「龍節」が「玉節」に改められるなど、更なる推敲があったことを示している。今、『筆語唱和』の本文によって改めて掲出してみる。[註8]

奉呈学士李公、洪鏡湖、　学士李公、洪鏡湖、厳龍湖、
厳龍湖、南泛叟諸公。　南泛叟ノ諸公ニ呈シ奉ル。

春庵

曾慕殊方文物昌　曾テ慕フ殊方　文物ノ昌（さか）ンナルコト

ヲ

幸逢玉節入扶桑　幸ヒニ玉節ノ扶桑ニ入ルニ逢フ
交隣修好太平日　交隣　好ヲ修ム　太平ノ日
勿厭梯航道路長　厭フコト勿レ　梯航道路ノ長キコト

ヲ

これを受けた韓使四人は、それぞれ次韻したが、今、東郭の詩のみを次に掲げておく。

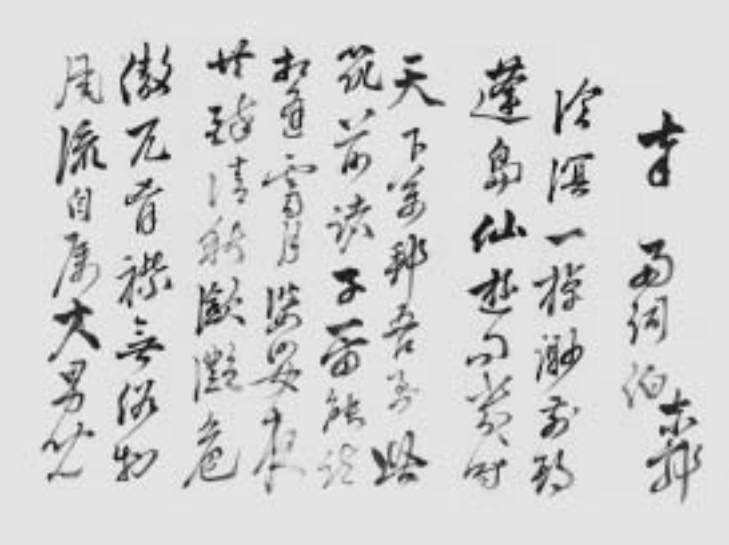
即席、奉次春庵詞伯恵眎　即席、春庵詞伯ノ恵眎スル
瓊韻　瓊韻ヲ次ギ奉ル。

東郭

両邦熙運属休昌　両邦ノ熙運　休昌ニ属ス
玉節来臨海上桑　玉節　来リ臨ム　海上ノ桑
孤棹淹留何足慰　孤棹　淹留　何ゾ慰スルニ足ラン
一床杯酒夜方長　一床ノ杯酒　夜方ニ長シ

春庵が贈詩において、長い海路の道中に配慮を示していたのに対し、東郭は、今晩の交歓は道中の辛苦を忘れさせるほどです、と喜んで見せる。相手を知らぬままに詠じられた贈詩が、東郭の呼応を待ち、唱和詩として生気を得た瞬間である。かくて『筆語唱和』の冒頭を飾る唱和は生み出されたのであった。

この後、春庵と松堂は、四人から順に贈詩を受けて、それ



李東郭贈詩詩箋
（九州大学附属図書館蔵（一一二）、縦三一・三糎、横四四・五糎）

ぞれに和詩を即詠する番となり、真に詩才を試されることとなるが、例えば、春庵が東郭の贈詩に次韻した詩、

奉和東郭公辱示韻　東郭公ノ辱示ノ韻ヲ和シ奉ル。

春庵

新詩瓊玖賜　新詩　瓊玖ノ賜
吟誦覚情親　吟誦シテ情ノ親キヲ覚ユ
曳白偏慚拙　曳白　偏(ひと)ヘニ拙キヲ慚ジ
垂青深沐仁　垂青　深ク仁ニ沐ス
只歓同席楽　只ダ歓ブ　同席ノ楽
共忘両邦人　共ニ忘ル両邦ノ人
跋燭好遮莫　跋燭　好シ遮莫(さもあらばあ)レ
清談欲到晨　清談　晨ニ到ラント欲ス

など、状況を一句ごとにきわめて直截に説明的に重ねてゆくという詠法は、近世前期の詩の特色でもあり、決してこれを低調とし斥けるべきものではない。翌日の二十日付け芳洲書簡（福五一）に「…韓客之御勝会、今日ニ至候而も、盛作佳妙之段、為申聞、私ニ至候而も大慶之義奉存候。…」と、春庵の唱和に佳作が多いことを褒めるように、よく勤め得たと評価すべきであろう。

猶、草稿（九一七六）の朝鮮における儒学や算学書を問う筆語は二十一日に、草稿（九一五七）の薬剤分量を問う筆語は二十四日に、それぞれ東郭、医員李斗文に呈して回答を得ている。この間、松堂も自詠の「藍嶋八景詩」を東郭らに披露し、『扶桑名勝詩集』（延宝八年刊三巻三冊）、『彦山勝景詩集』（正徳四年刊七巻七冊）などの刊行に知られるような、当時、わが国の詩壇で盛行を見ていた十景詩八景詩の手際を見せるなどの活躍もあり、二十六日、盛会のうちに韓船は江戸へ向けて藍島を後にしている。

さて、県立図書館、九州大学には、この際、贈られた韓使自筆の詩と筆語が二十五点認められ、その大振りの奉書紙に残された墨痕は、筆談唱和の座の臨場感を鮮やかに伝える。自身の贈詩とともにこれらに施訓を行い、『藍嶋倭韓筆語唱和』がまとめられたのは、春庵の識語よりして、九月末のこと、早速、本書は十月六日に益軒に呈されている（『日記』）。十一月六日付け櫛田平次書簡（福八六）、翌正徳二年五月十七日付け小倉定季書簡（福十）など、本書の借覧・筆写を願う旨を記す書簡も散見され、また本書の写本が、福岡近郊だけでも県立図書館に二冊（三七七二・三七七三）、九州大学檜垣文庫に一冊（ラ-4）と、比較的多く残ることは、韓使応接への関心がいかに高かったかを示すものであり、こうした需要が『鶏林唱和集』のような大部の唱和集を刊行する背景を準備したものと言えよう。

三　交わされなかった筆語唱和

『藍嶋倭韓筆語唱和』は、韓船が藍島を発った翌日、八月二十七日の詠として春庵の「和呈芳洲清韻」、松堂の「奉次芳洲韻」、同「次東郭韻呈泛叟案下」など三首の七言律詩を掲げて終わっているが、続けて末尾に次のような一文が記されてある。

右三律、慈島（じのしま）ニ寄セ贈ラント欲シテ果タサズ。外ニ春庵ノ「再ビ李東郭ニ問フ書」「南泛叟ニ贈ル書」有リ。未ダ寄セ致スニ及バズシテ韓船已ニ慈島ヲ発ツ。姑（しばら）ク北帰ヲ竢ツノミ。（原漢文）

即ち、これらは次の韓船の中継地である慈島（現福岡県宗像郡玄海町地島）に送致しようとして果たさなかったものであり、復路を待って呈しようと言うのである。『黒田新続家譜』巻十六「宣政記」の記述によれば、韓船は二十九日に地島を発ち、十一月朔日、江戸に入り将軍に謁見、同十九日に江戸を発ち、再び藍島に着いたのは年が明けた正徳二年二月朔日のことである。同書には、

…二月朔日、重て藍嶋に着船し、翌二日藍嶋を出帆す。其後五月廿三日対馬守より使を以て、今度韓客往返滞なく済たる悦として、太刀馬代・虎皮・豹皮二種一荷贈物あり。宣政よりも応して贈物せらる。…

と、[註9]韓船は翌二日には早々釜山へ向けて出帆し、すべての応接がめでたく終了したことを記しており、結局、このとき先の律詩三首と東郭・泛叟への筆語は贈られることはなかった。

正徳元年末～二年における春庵の動向は、その間の日記が欠落するために不明な点が多いが、正徳元年十二月二十四日付け益軒の書簡（福八-五〇一）、翌二年一月六日付け益軒の書簡（九八七-四〇五）に藍島滞在を気遣う言辞が見られることから、春庵は少なくともこの頃には藍島に渡り、応接の準備に当たっていたと思われる。天和度の韓使来訪の際には、復路でも藍島において筆談唱和の機会が持たれたこともあって、[註10]春庵のもとには韓使との取り次ぎを願う依頼が多く寄せられている。

のちの十月、春庵が芳洲に宛てた書牘「贈雨森芳洲書」（『春庵文稿』第六冊所収、福三三六五、写本十六冊）には、東郭の学識に敬服する意を述べ、続けて、

…別ニ鄙問数條、并（なら）ビニ三書記曁（および）ビ良医ニ寄セント欲スル鄙書、各ヲノ一通有リ。益軒モ亦タ疑目十数ヲ書スレバ、則チ東郭ニ寄ント欲ス。且ツ、益軒ノ著ハス所ノ『慎思録』十餘巻有リ。製述官ノ一語ヲ請ヒ、以テ之ガ

序ト為サント欲ス。並ビニ携ヘテ藍島ニ到リ、足下ヲ煩シ奉ラント欲ス。又、松堂、緣適、恙有リテ再ビ往クコトヲ得ズ。以テ足下ニ奉ル啓一通、及ビ李学士ニ寄セル排律百五十韻、之ヲ附托ス。且ツ同邑ノ韻士十餘輩、各ヲノ僕ニ附スルニ文辞ヲ以テス。之ヲ韓客ニ具ヘント欲スレバナリ。然レドモ、皆、宿志ヲ遂グルコトヲ得ズ。恨ミト為スコト尤モ深シ。…（原漢文）

と見える。冒頭に言う「鄙問数條」は、当代朝鮮における朱子学者の姓名や「乃呂」なる獣を問う筆語文案（九一七九）に、「三書記暨ビ良医ニ寄セント欲スル鄙書」は、前者が再会を悦ぶ意を述べる浄書された鏡湖・龍湖宛書牘（福二七八、正徳二年一月撰。猶、九一七八も浄書された同一書牘）あたりに、後者が朝鮮における医学書や名医の姓名を問う浄書された筆語文箋（九一七七、正徳二年二月撰）にそれぞれ相当しよう。そのほか、松堂の芳洲宛書簡や東郭宛の排律、更に「同邑ノ韻士十餘輩」の文章を預かるなど、韓使との交誼を求める声はとどまるところを知らない。

また、益軒が託したと言う東郭に対する「疑目十数」は、正徳二年一月五日付け益軒の書簡（九九六-四六四）にその条目が見え、『大和本草』の著者らしく「うぐひす」「桜」「人参」「きすご」「鯛」「酒味」など諸品のことを尋ねるよう頼んでいる。特に注目されるのは、自著『慎思録』の序文撰述を同じく東郭に願い出ていることで、先の正徳元年十二月二十四日付け書簡（福八-五〇一）では、韓使に呈する『慎思録』清書本を藍島において作成するよう指示し、翌二年一月十三日付け益軒の書簡（福四七-三七〇）では、五日付け書簡で依頼していた「疑目十数」の草稿を送付するとともに、

一、『慎思録』調申候由、御煩労察申候。序文之事、宜様御才覚被成可被下候。

一、韓客ニ御尋被成可被下候事、別紙ニ草稿ヲ遣申候。其地ニ而御浄写成可申候者、御書改被成候而可被下候か。就長き事ニ而難成事も御座候者、御無用ニ可被成候。御覧被成、不可然事ハ御除可被成候。…

と、序文依頼の件に念を押している。天和度の韓使来訪時以来、文壇には韓客の唱和詩や文章を手放しに喜ぶ風が目立って見られた。加藤正利『富士百詠前編』（天和二年序刊一冊）が韓使の題詞を掲げ、大高坂芝山『芝山会稿』（元禄十年刊十巻首一巻十一冊）が韓使の贈詩を諸家評のひとつとして標榜するなどはその一例である。また、正徳度、江戸での韓使応接を務めた新井白石の詩集が、正使趙泰憶・副使任守幹・従事官李邦彦、および李東郭ら錚々たる顔触れの序跋を得て『白石詩草』（正徳二年刊一巻一冊）として刊行をみたことは

よく知られるところであろう。『慎思録』は『自娯集』（正徳四年刊七巻七冊）と並んで益軒最晩年の執筆にかかる、いわば自らの学問の集成をはかろうとした著述、なればこそ、その巻頭を韓使の序文で飾りたいという思いが強かったことは疑いない。類い稀な思想家も、やはり時代の雰囲気を一身に受けていたことを示す一事と言えよう。『慎思録』は正徳四年、東郭の序文を得ることなく、益軒自序を冠して刊行をみている。

四　韓使応接の波紋

韓使一行が本国に帰着してしばらく経った五月、京都でこの度の唱和集『鶏林唱和集』正編が早速刊行された。京都の書肆・柳枝軒茨木多左衛門の知らせで、本書の江戸・京都の巻が刊行準備を終えたことを知り、いちはやく『藍島倭韓筆語唱和』を京都に送るよう春庵に薦めたのは、ほかならぬ益軒であった。二月二十二日付け益軒の書簡（九五一―二二二）の一節。

…京都茨木多左衛門状下候。韓客京都・江戸筆訳唱和、於京都刊行既成候。此地へ有之唱和、早く上せ候て可然由、申越候。貴朋御存被成候書林、刊行可仕由申越候と見へ申候。早ゝ遣候而可然候。…

「貴朋御存被成候書林」とは、『鶏林唱和集』の編者である瀬尾用拙斎。家業は奎文館と号する書肆で、伊藤仁斎の門に学び詩もよくした。用拙斎の詩稿（九六六三）が残るのを見ると、春庵とは親しい間柄であったのだろう。結局、春庵の『藍島倭韓筆語唱和』は用拙斎のもとに遅れて届いたため、大幅に省かれはしたものの、その一部が無事に『鶏林唱和集』巻十四に登載され、詩名を留めることを得た。[註11]

さて、春庵が韓使応接を通して得たものは単に詩名のみにとどまらない。むしろ藍島において雨森芳洲と面識を得た一事の方が、春庵の学問上、より大きな意義をもっていたと言えよう。のち、春庵は正徳五・六、享保三年と、数度の江戸滞在を経験し、荻生徂徠、大潮元皓、服部南郭など古文辞派の学者と交渉をもつなど、九州における古文辞学流入の窓口として位置づけられること、前掲宮崎・高橋論文に詳述されるとおりである。しかし、朱子学者春庵と新興の古文辞学派の間に存する違和感は覆いようもなく、私見では、この時点で、古文辞派との違和感を和らげ、古文辞学へ目を向けさせる、いわば誘導役を担ったのが、芳洲であったと思われる。芳洲は、春庵と同じく松永尺五の学脈に連なるがゆえに、かねてより深く追慕していたこと、前掲「贈雨森芳洲書」にお

いて春庵自身述べるところでもあり、同時に彼は古文辞派にも近い存在であったからである。例えば、春庵は大潮に唐話学を学び、自らも白話文を書くほどであったが（『春庵文稿』第九冊所収白話文書簡）、その方面への開眼も、唐話・韓話をこなす芳洲の語学力に接したことが大きく作用していると思われ、実際、芳洲書簡（九三二）では、「庸蔵子」なる人物を斡旋して唐話を学ぶよう薦めるなど、春庵の唐話学習に貢献しているのはその証左となるであろう。

かくて、芳洲との出会いを一つの契機として、古文辞学への接近を果たした春庵であったが、のち、徂徠が、李・王のみを尊奉して朱子学を完全に否定するという、偏狭な思想を抱懷したため、遂には、古文辞学を離反するに至っている（『春庵文稿』第十一冊所収「復月成君書」「読徂徠書論」）。この間の春庵における思想的葛藤、およびその背景をなす江戸での交友など議すべき問題は多く存するが、もはや本稿の目的からはずれるゆえ、すべては別稿を期することとしたい。

註1　同書上・中巻付刻の徂徠書牘「与江若水書」、「与県次公書」。

2　同論文第三節「徂徠学流入前後」（宮崎）、第七節「韓使唱酬」（高橋）。

3　資料の概要は、春庵―蘿亭―廊庵―梅廬―復斎―梧亭―榛斎―瀟韵―謙窓など九代に亘る竹田家当主宛の書簡・詩歌箋六八〇点、および巻子本に装丁された貝原益軒の春庵宛書簡一〇九軸五四二通。いずれも配架番号は与えられぬまま貴重書庫に収蔵される。これらは、昭和四年頃より、折半して県立図書館と九州大学において保存されるようになったものであること、川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『新訂黒田家譜』第七巻（中）（昭59　文献出版）解説（広渡正利執筆）に詳しい。県立図書館・九州大学に分置される益軒の春庵宛書簡は、既に、井上忠『益軒資料（四）書翰集上』『同（五）書翰集下』（昭34　九州史料刊行会）に、県立図書館寄託の雨森芳洲、酒泉竹軒、荻生徂徠らの春庵宛書簡は、『新訂黒田家譜』第七巻（中）（下）に、それぞれごく一部分の翻字があり、竹田家旧蔵資料の豊かな内容を垣間見せている。県立図書館寄託分の概要はその仮目録『竹田文庫目録（稿）』（昭47　福岡県文化会館）によって把握することができるが、九州大学分については、井上氏『益軒資料』以外に研究された形跡はない。ゆえに、竹田家旧蔵資料の全貌を解明するために、一昨年より調査グループを組織し、目録作成を目指して調査を続行中である。本稿は、その成果の一環として解されたい。

4　以下、福岡県立図書館寄託竹田文庫、九州大学附属図書館蔵竹田家旧蔵資料に言及する際には、（　）内に所蔵先をそれぞれ福九と略記し、続けて整理番号を記した。また、本文引用の際には、原則として原資料に依拠することとし、通行の字体を用いたうえ、句読点・濁点・読み仮名などを私に付している。

5　『新訂黒田家譜』第七巻（下）所収。以下、『日記』の引用は

本書による。

6 松田甲「人見竹洞と洪滄浪」（『日鮮史話（一）』原本昭2 復刻版昭51 原書房）、徳盛誠「唱和の世界の成り立ち――『鶏林唱和集』中の唱酬より」（「日本思想史」四九号 平8・10）などを参照。

7 猶、本詩は『春庵詩稿』（福三三六六、写本八冊）中にも見えない。

8 引用は福岡県立図書館寄託本（三七七）による。

9 引用は、『新訂黒田家譜』第三巻による。

10 前掲宮崎・高橋論文参照。

11 また正徳二年十一月十六日付け益軒の書簡（福二-一四九）には、

一、去秋、与韓客御対接之御筆訳、御唱和刊行之事、書肆多左衛門へ昨日不申遣候。只今、状を調（とゝの）へ、右之事、頼遣し可申候や。…

と、筆談唱和刊行の件を多左衛門に依頼すべきかどうか、春庵の意向を窺う旨が記されている。これは、『鶏林唱和集』の件に係わるものなのか、あるいは、益軒・春庵に『藍島倭韓筆語唱和』を単独で多左衛門を版元として刊行する意図があったことを示すものなのか、判然としない。今、疑問として左に記しておく。

[付記] 竹田家旧蔵資料の閲覧にあたっては、福岡県立図書館郷土史料課嘱託の児島ひろみ氏、九州大学附属図書館情報サービス課図書館専門員の園田國昭氏のご高配を賜った。記して御礼申し上げます。猶、本稿は平成十四年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（おおば たくや・日本学術振興会特別研究員）